

自然と人類

星見小路

蒼穹は無限静寂。

天地は永劫の沈黙。

それは底知れぬ深淵、宇宙の中の微塵の一點。

又始めなく終りなき時の流れの一瞬時。

白銀の雪に覆はれた高峯、ユングフラウミモンブランが

一瞬の間、短かな對話をした。

* * * * *

……嘗て私は何かの書物でそうした物語を読んだ果してそれが小説の中の一情景であつたか、又何かを論じた論文の一節であつたかは、全然忘れ果てた。多分、それは露國の文豪ツルゲニエフが書いたものであつたらう。

而も又其物語は、實際さんなものであつたかも知然と思ひ出せないけれども、兎に角、次のやうな氣分のものであつたやうである。……

* * * * *

長い間の沈黙であつた。

ミ、モンブランが其の沈黙を破つた。

『おい、兄弟、あの下界の方を見ろよ。何だか黒い小さな者が澤山生れて來たぢやないか。動いて居るよ。が、一體何時生れたんだらう。そして一體何者だらう……』

モンブランは口を閉ぢた。

一瞬間の沈黙である。だが、其の間に地上の數萬年が流れ去るのだつた。

ユングフラウは答へた。

『オ、まあ何と言ふ蠢動だらう。そして見て居る間に、地上の果から果てまで満ち充ちて來たぢやないか……』

二つの高峯は又一瞬、黙し。

然し其の間に地上には實に、數十萬年の星霜が流れ去つた

蒼穹は無限の沈黙。

大地は永劫の静寂。依然として變りはない。

モンブランは又言つた。

『だが、兄弟見ろよ。大分、もう衰へて來たぢやないか。丁度隕星が流れる時に引く尾が消える時のやうに。あゝ段々數が少なく衰えて行く。……』

一瞬の沈黙である。

然しやつぱり此の間に、地上では數萬年が過ぎ去つたのだユングフラウは答へた。

『そうだ、そう言へば、もう殆んど影を絶つて仕舞つたぢやないか。もう一匹も居ない。だが、今のは一體何物だつたらうナ。……だが俺達はまだにしやべりすぎた。どれ一つ眠らうか。ぢやおやすみ……』

二つの高峯は永遠に黙した。

そして永劫に地上には聲は無いであらう。

見よ。下界を。

そこは一面の氷雪白皚々として、地を覆壓す。何物もない。

* * * * *

物語の肝要な點は大體こんなやうなものだつた。記憶する地球上に一瞬生れ出で、又一瞬にして消え逝いたもの、そしてそうしたものは再び生れないのである。

それは一體何物であつたらう……。

こう言ふ話を讀めば何と心細い感じがあるでないか。然し吾々はそう無精に悲觀するにもあたらない。

* * * * *

宇宙は偉大である。人間は微塵にも等しからう。

時の流れは永遠である。人生は一瞬であらう。

けれども、微塵に一瞬が果して價値なきものであらうか。人類の一人一人が人の世に一瞬生きて又死するやうに、人類全體も又宇宙の中に一瞬發生し、そして死滅する。

けれども一瞬が果して無意義であらうか。

私は言はう。一瞬なるが故に尊い。

而してその一瞬の間に人類は考へることをもつ。思想をもつ。思想は一切を征服せずには置くまいと努める。モンブランを征服し、ユングフラウを征服し、地球を征服し、太陽を征服し、星辰界を征服し、宇宙を征服し、無限を征服し、更に神あらば神をも征服する所のものは、實に人類の思想のみであらう。

人類の生存は一瞬であらう。けれどもその人類が築き上げた思想は時間と空間を超越するものではあるまいか。

宇宙萬有が一であるならば人類の思想は汎^{エン}である。

古人言はずや

こ。エンは即ちパンである。(一九三三、七、一五)。

正誤

第四十四號(九月)月の運行中誤植あり二百九十八頁六行の碧山は碧山の誤り同頁十一行の巷范は茫茫の誤り